

教育センターフォーラム 発表テーマ及び概要

第1分科会 (3F セミナー301) ①外国語活動と英語教育の充実と連携～英語力の向上をめざして～

【1-1】①「小学校教育をより豊かにする外国語活動」～1年間の専科指導から～

言語教育部門所員

今年度、専科加配教員として2小学校5年生、6年生の外国語活動を行ってきた。両校差のない授業を行う為、指導案・指導内容・教材はすべて同じものを使用してきた。1学期は専科教員による授業展開、2学期は、TTによる授業展開、そして3学期は学級担任による授業展開を目標とした。取り組みの中で学級担任の一生懸命な授業での姿をみて、児童の姿はよりいきいきしたものになっていった。学級担任とチームになり、目的ある教材研究と指導案の共有から改良までを報告する。

【1-2】①使う喜びを感じる“忍小版英語村”の活動

言語教育部門所員

これまで、外国語活動を通してコミュニケーションの育成に努めてきた。大まかな授業の流れが定着し、教師と児童がともに外国語に慣れ親しんできた。今年度は、習った外国語を活用する取り組みの一つとしてNETとともに他教科と関連付けて外国語活動を行った。そんな“忍小版英語村”の活動を通して児童の「話せた！使えた！通じ合えた！」という喜びを大切にしたい実践を報告する。

【1-3】①「Can-Do リスト作成前にしておきたいこと」～校内統一指導の開発がCAN-DO リストを支える～

言語教育部門所員

英語科として小中連携を進めて行くにあたり、CAN-DO リストや9カ年のカリキュラム編成の策定が求められている。連携を考える中で気づいたことは、「まず中学英語の指導方法の整理・統一」である。中学校英語科は教員数が多人数化しやすく、その結果積み上げ教科の割に学年間の授業内容に連続性が持たせにくい傾向がある。将来的にCAN-DO リストの下支えをする校内統一の指導項目の開発過程を報告する。

【1-4】②学級担任あつての外国語活動

言語教育部門所員

小学校専科加配教員として外国語活動を進めていく中で、学級担任の協力があってこそより良い授業が展開できるということを痛感するようになった。この報告では、なぜそのような思いに至ったのか、その実際と、今後の課題について触れる。

第2分科会 (3F302) ②/③ユニバーサルデザインを土台とした学び合いの授業づくり～ ②支援教育研究協力校2年目の取り組みから ③支援教育研究協力校1年目の取り組みから～

【2-1】②「どの子にも確かな学力保障を」～支援教育研究協力校2年目の取り組みから

支援教育部門所員

今年で2年目となった支援教育研究協力校の取り組みから、本校での実践を報告。全ての児童の確かな学力と安心できる居場所のためにどの子も「わかった！」「できた！」と達成感が持てる取り組みと、様々な人的、物理的バックアップを紹介。

【2-2】②ユニバーサルデザインの環境設定と授業づくり

支援教育部門所員

昨年に引き続き、「楽しく進んで参加する授業づくり」をテーマに研究してきた。どの子にも分かりやすい授業、様々な課題を持つ児童が楽しく参加できる授業はどうあるべきか。そのためには、どのような環境が必要なのか。研究授業や日々の実践から学んできたことから、2年目の研究成果と課題を踏まえて、今後の方向性についても考えてきたことを報告する。

【2-3】③支援教育について～この4年の流れを振り返って～

支援教育部門所員

平成19年(2007年)4月に特別支援教育が正式に実施されてから8年。職員の中にも「特別支援教育」が位置付いてきたと感じられる部分と、新たな課題を感じる部分が現場にある。これまで学校で行ってきた「支援教育」の取り組みの流れを振り返りながら、前進面と課題を改めて確認する。

【2-4】③支援教育研究協力校1年目の取り組みから考える体制づくり授業づくり

支援教育部門所員

年々増加傾向にある支援を要する生徒に関して、どのような支援をおこなっているのかを紹介する。また、そこから見えてきた、支援教育の視点からの校内体制や授業づくりの課題について検討する。

第3分科会(4階 科学実験室)④今求められる道徳授業のあり方 ⑤不登校児童生徒への支援 ⑥思考力を育む理科の授業

【3-1】④今求められる道徳授業のあり方について～児童生徒アンケートから～

調査・研究部門所員

平成30年度(2018年)からの教科化や、豊かな人間性をはぐくむ教育として、道徳の授業にあり方が喫緊の教育課題となっている。児童生徒向けのアンケートから見える子どもたちの道徳の授業に対する意識や現状を報告し、教科化に向けた取り組みの方向性をさぐる。

【3-2】⑤乗り遅れを出さない!再乗車へ!～不登校対策と予防～

教育センター・不登校児童生徒支援室「ふれあいルーム」

「一度乗り遅れたら再乗車は難しい」と言われる不登校問題。不登校児童・生徒が通う「ふれあいルーム」で、子どもと保護者の話を聞いている経験から、「本当にあった事例」や、有効な不登校予防と対策を紹介する。ほんのちょっとした気遣いや、対応の仕方など不登校児童・生徒を救えることが必ずある!

【3-3】⑥ものの温度と体積の考え方

理教科教育部門所員

中学校での小学校理科に関するアンケートで、各学年のどの分野が印象に残っているかを尋ねたところ、4年生の単元が全くないことが明らかになった。4年生担当の教諭によって、気体、液体、固体を加熱あるいは冷却した場合の体積変化における実験での工夫により、学習内容の定着を図った実践を報告する。

【3-4】⑥拝啓 理科に興味がある方々へ…

理教科教育部門所員

「職は人を育てる」ということなのか、専門的な知識も、その知識の授業への活用法も知らなかったが、多くの理科的活動を通し、たくさんの人に出会い、理科の話に楽しんで参加できるようになってきた。所員会の3年間を振り返り、これまでの取り組みの総括と3学期に控える中学校での所員の共同研究授業について報告する。

第4分科会（4F 教育工学室） 茨木市学校情報化「ICT 機器」を活用した教育 ⑦ICT 機器（タブレット端末）やコンテンツを活用した授業力向上 ⑧情報モラル教育のこれから ⑨校務の情報化で進める学校情報化

【4-1】⑦e-learning「いばらきっ子スタディ」スタディの活用による学びの広がり

情報教育部門所員

e-learning「いばらきっ子スタディ」の新システムが小・中学校に導入されてから2年経つが、中学校で活用が多くなるように、無理なく、授業等で効果的に使える方法を模索した。現状や課題も含めて実践方法などを紹介する。また、教師の声を反映したこれからの展望も報告する。

【4-2】⑧「情報モラル教育」の実践

情報教育部門所員

スマホ・タブレット・ゲーム・・・子ども達の日常生活の中で、今や当たり前のように定着している。これからの情報化社会で生きていく子ども達に情報モラル教育の必要性を感じ、取り組んできたの1年間の実践報告。

【4-3】⑨校務の情報化でムダを省こう！

情報教育部門所員

OECD や文部科学省調査で「教師は忙しい」と示されている。教材研究や児童生徒の指導。それに加えてさまざまな事務的な作業もある。一人一台ある校務用端末（パソコン）を活用することで、ムダを省き、事務的な作業にかかる時間を減らすことができないか。校務の情報化・効率化に向けた取り組みを紹介する。

【4-4】⑦タブレット端末（パソコン）の実用例と見えてきた強み・課題

情報教育部門所員

今年から茨木市の全小学校に配備されたタブレット端末（パソコン）。100時間程度、授業に活用して見えてきた「タブレットとの上手な付き合い方」を、実用例（体育・社会・図工等）を踏まえながら紹介する。